

# 研修会報告

2022 年度滋賀支部主催第 1 回資格更新研修会

2022 年 7 月 31 日（日）

日本臨床発達心理士会滋賀支部主催

講 師：清水里美先生（平安女学院大学）

テーマ：「新版 K 式発達検査 2020 の改訂ポイント」

清水先生は大学で保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生さんをご指導されながら、人間の発達を理解する出発点となる発達検査法を目指して、新版 K 式発達検査（以下新版 K 式と略す）の改訂作業に長年携わってこられました。

ご講義では、まず、発達検査と WISC に代表される知能検査との違い、K 式の特徴、K 式の改訂手順や標準化作業など基本的な枠組みについて説明されました。知能検査は対象児が同一年齢集団における相対的位置を偏差値方式で調べるのに対し、K 式は対象児の発達が何歳くらいの子どもの平均的な発達水準に相当するかを調べるものとのことで、継続的に実施することによりその人個人の発達の变化を捉えることが可能になります。そして、K 式は個々の課題に特有な能力、「特殊因子」を想定して作られているのではなく、いくつかの検査問題に答えるときに共通して働く能力、「一般因子」を想定している、そのため一つの検査項目だけでなく他の項目との関連を検討する必要があるとのことでした。また、K 式は行動観察を重視していて検査場面を構造化された観察場面と捉えており、日常生活場面との関係を検討すること、不通過の内容分析やどのようなヒントがあれば理解できるのかを考えることが大切であるとのことから、その人らしく生きるため支援に生かすアセスメントを目指されていることを、基本に立ち返って改めて感じとることができました。

上記の基本を押さえ直された上で、新版 K 式 2020 改訂の主な内容について丁寧な説明がありました。今回の改訂の主要な目的の一つは、2001 年版以降の発達障害概念の広がり、なかでも「知的発達に遅れはないが偏りが目立つ」ケースの相談増加に対応することで、一つの検査で知的発達の側面と対人的な側面の両方を把握できるよう、対人・社会性の発達を評価できる項目が追加されたとのこと。社会性という場合の他者水準をどう捉えて検査項目を新設したかなど様々な先行研究に基づいて検討された改訂の背景や、改訂にあたって収集された健常児のデータに基づいて説明くださいました。さらに、実際に検査時の様子をビデオ撮影したものを使った説明や、講習会の受講者からの質問を例に挙げて、それに答える形での説明により、参加者が具体的立体的に学び、検査の意義や意味についての理解を深めることができました。

当方は今年度から就学前の保育園・こども園・幼稚園在籍の障害児保育や特別支援教育対象児の巡回相談を主とする部署に異動し、毎日新版 K 式を使って発達評価し相談をしています。実際に 2020 年版を

実施し、次のような例を経験しています(一例として「絵並べ」を挙げます)。表出言語の遅れと発音不明瞭があって先生や友だちの話を理解していない、知的発達の遅れがあると園で見なされていたお子さんが、数の理解や積み木構成の項目だけでなく「絵並べ」を通過しました。その取り組み方を園の先生も目の当たりにしたことで、実は第三者の状況や意図を理解していて、本人としてもすじみちをつくる力が出てきているが、それを表出言語ではうまく表せないのではないかと園の先生や保護者と考え合うことになり、その後の実践や育児が変わっていったという事例がありました。逆に、他の項目は通過するけれど「絵並べ」やサリーとアンの課題が不通過で、その理解の仕方と対人関係や集団生活で苦労していることがリンクして考えられ、支援のポイントがより明確になったという事例もありました。「絵並べ」は、表出言語に課題があっても第三者の状況や意図を理解しているかを観ることができるように工夫されているとの清水先生のお話をうかがい、発達相談臨床で実感したこととマッチしていて、なるほどと思いました。

改訂の主要な目的のもう一つは、年長になってから適応上の問題から初めて発達検査を受け、教育的、福祉的支援につなぐ相談の増加に対応することであり、発達年齢 14 歳以上は学習経験の差が大きくなるため「発達年齢」よりも個人の該当年齢における相対的位置を観る方がよいとの判断で偏差値方式を導入し、そのために項目数を増やしたとのことでした。その際、日常生活に関わるものは一度獲得されるとその力が落ちにくいことから、つまずきやすい算数の単元である割合の課題などでは、買い物など実際の生活で経験する場面を想定して考えられるように工夫されているとのこと。それぞれの個人の時間軸において発達的变化を把握することが特徴であると捉えていたK式に、なぜ 14 歳以降に偏差値方式が導入されたのか疑問に思っていました。清水先生の説明から、そこに至る客観的かつ膨大な作業・検証がなされただろうこと、また、生活の中で発揮している力を生かしながらかつまずきやすいところを理解してその人らしく生きていける支援の目標を何とか把握したいとの、K 式を作成、改訂してきた方々の理念や姿勢が現れているのではないかと考えました。実際はどうなのか、成人期の臨床をされている方々からの報告や意見を聞きたいと思いました。

その他、検査用紙の変更点や月齢計算では2歳以降は全て簡便法を用いるなど、明日から役立つ情報を教えていただき、最後には、検査をする側に求められる役割や責任にも触れられ、手引書や解説書を斜め読みして正確に理解していなかった当方は、今回改訂の機会を、K 式を学び直す契機にしたいと思いました。そして、専門的知識を積極的に学ぶとともに、子どもの日常生活から仮説をもって相談に臨み、その仮説を発達検査結果や行動観察、聴き取りによって検証しながら、その人らしく生きていける支援を現場の先生や保護者とともに考えられる相談者でありたいとの願いを強くしました。しかし、それが我流にならないためには、K 式を使って発達相談臨床にあたる方々との意見交流が欠かせません。11 月 13 日(日)に清水先生を助言者にお招きして、滋賀支部主催の新版 K 式 2020 の結果をもとにした事例検討会を実施予定ですので、是非ご参加ください。(滋賀支部 西原睦子)